

Title	源氏物語の研究 : 紫の上論を中心に
Author(s)	胡, 秀敏
Citation	大阪大学, 1993, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29168
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名 胡 秀 敏

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 0 8 3 3 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 5 年 5 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当
文学研究科 国文学専攻

学 位 論 文 名 源氏物語の研究

—紫の上論を中心に—

論 文 審 査 委 員 (主査)
助教授 伊井 春樹(副査)
教 授 信 多 純 一 教 授 前 田 富 祺

論 文 内 容 の 要 旨

第一章 中の品物語の長編と短編

帚木・空蟬・夕顔の三帖は、緊密な構成のもとに執筆されており、そこで語られる雨夜の品定めは、中の品の女性を物語に導く役割を果たし、左馬頭の中の品重視論によって源氏はそれまで知らなかった中の品の女性へ関心を向けるようになる。具体的には空蟬・夕顔・末摘花の登場となるのだが、これは帚木三帖に限らず若紫巻以降にも及び、その影響として登場したのが紫上（紫の上）であった（第一節）。紫上は、空蟬・夕顔・末摘花と同じく発見された場面やその住まいなどからまさに「葎の門」の女性の系譜にある。理想とする藤壺中宮の「紫のゆかり」にありながら、源氏によって強引に二条院へ迎えられたのは、紫上が中の品であったことを証している（第二節）。前半の物語においては、夕顔と六条御息所、朝顔姫君と空蟬などと、中の品と上の品とが対偶的に描かれており、それは藤壺と紫上との関係にもあてはまる。これによっても、若紫はまさに中の品として位置づけられた女性であり、藤壺の代りに二条院へ引き取られて「わが心のままに取り直して見」られる必然性があった（第三節）。藤壺への恋慕と、中の品の典型である空蟬への執着の二つの軸の交錯するところに紫上の登場の意義があり、無関係に思われがちな空蟬と紫上の運命とはきわめて類似したものがある。初音巻で尼となった空蟬は源氏の二条院へ引き取られ、その辛酸に満ちた人生の回顧をするが、この思考方法は若菜下巻で半生を振り返って苦悩する紫上の人生とも重なってくる（第四節）。

第二章 光源氏の求婚

源氏が紫上を二条院へ迎えたのは、彼女の境遇への同情と葵上との冷たい関係のほかに、藤壺の面影を見いだしたことに重要な意味がある（第一節）。世俗の常識に反した引き取りの申し出は奇矯な言動であったにしても、藤壺への限らない思慕が源氏を紫上へと駆り立て、「ゆかり」としての造型もなされることになる（第二節）。若紫巻のかいま見は、『伊勢物語』初段の影響ではあるものの、昔男は「いちはやきみやび」であるのに対して、源氏は藤壺への思慕を背景とする。彼は、帰京した紫上のもとを訪れて一夜をともにするが、これは藤壺との「密会再現」にほかならない。また、紫上を自邸に引き取って成長を待つのは、藤壺の面影を求める行為による新しい男女の結びつきであ

り、手の届かない藤壺を少女によって再現することでもあった（第三節）。源氏は紫上と表面的には結婚形態をとりながら、あくまでも親子関係を演じ続け、精神的には藤壺との絆を保つことが、初期における紫上との基本的な関係のあり方である（第四節）。

第三章 藤壺の実像と紫の上の悲劇性

源氏が紫上（若紫巻）を引き取ったのは、「藤壺のゆかり」の属性と、孤児同然であった境遇とによっており、この二つが長編物語の女主人公として存立させる重要な根拠である。藤壺との密通、冷泉院の誕生、そこからくる満たされない思いを慰藉する役割として紫上の存在が浮かび上がってくる（第一節）。正妻葵上没後、源氏は紫上一人に思いを寄せるようになるが、賢木巻になると朧月夜、朝顔姫君の登場によって、その愛は不安定なものであることが露呈してくる（第二節）。さらに、源氏の須磨・明石行きにともなう明石上との結婚、姫君の誕生は、受領であるだけに身分の違いがあるとはいえ、紫上の存在基盤を一層不安なものにしていった（第三節）。源氏にとっての紫上は「ゆかり」としての存在にすぎなく、藤壺は没後も彼の心に強い絆として存在していった。いわば紫上は、登場の最初から最後まで「ゆかり」であり続け、それゆえの憂愁に苛まれた生涯でもあった（第四節）。

第四章 六条院の春秋論

紫上が「春の御方」とされ、「桜」に比せられる意味について、物語に登場する場面の分析とともに、『古今集』春部の桜の歌（七十首）の配列に象徴される季節の推移と、彼女の不安な運命とを重ねて考察する（第一節）。薄雲巻での春秋論争は、秋好中宮（梅壺女御）が必然的に秋と結びつけられているのに対して、紫上は源氏から春の曙に心を寄せる女性としてなれば強制されたものであった（第二節）。その延長として、秋好中宮の御殿を基本としてできあがった六条院での春秋論争では、紫上はいわば従属的な春の女として源氏によって位置づけられる（第三節）。紫上は表面的には六条院での女主人の地位にありながら、秋好中宮の登場により相対化され、さらに女三宮の降嫁は彼女の立場を根底から揺るがしてしまった。「春の御方」として桜にたぐえられる紫上は、『古今集』の桜の配列に見る、盛りからやがて散るように、彼女も六条院の崩壊と運命をともしることが暗示される（第四節）。

第五章 玉鬘十帖における紫の上

紫上の春の御殿は「生ける仏の御国」と表現されるものの、そこには源氏も明石姫君も住んでおり、彼女一人が代表する町（御殿）ではなく、その他の女性たちとともに、源氏の栄花を支える一人の女性にしかすぎない存在になっていた。しかも正月の夜、源氏は明石上のもとに赴いているだけに、紫上を頂点とする六条院世界のように見えながら、実質は虚しい現実がすでに展開していたのである（第一節）。明石上は、明石姫君の栄達にともない、確実に地位の上昇がはかられるが、相対的に紫上は徐々に物語舞台から退かざるを得ない状況に置かれており、初音巻はまさにその栄花の残像が描かれているにすぎなく、女三宮降嫁以前に六条院の崩壊は始まっていた（第二節）。玉鬘巻での玉鬘の六条院入りは、紫上のなれば聖域化していた観念的な絶対性を内部からつき崩し、彼女の存在を脅かすまでになってくる（第三節）。初音から野分巻あたりまでになると、玉鬘は「玉鬘十帖」だけではなく、六条院物語においても中心的な人物に成長し、そのほか明石上、秋好中宮との関わりもあり、紫上はますます存在の希薄な女性となってしまう（第四節）。

第六章 紫上の嫉妬をめぐって

明石上と紫上とは身分が違うとはいえ、将来中宮になる姫君の母だけに確実に源氏との深い結びつきが生じ、紫上としては妻の立場から自己主張をし、激しく嫉妬せざるを得なくなる（第一節）。朝顔姫君への嫉妬は、身分の高い女性への紫上の劣等意識とともに、梅枝巻における彼女の居所が寝殿から東の対へ移されるという変化により、六条院に高貴な女性が迎えられる可能性への不安な思いも背景にはあった。紫上の存在は「ゆかり」として保証されているにすぎなく、絶対的な地位ではないだけに、朝顔の再登場は彼女に苦悩と不安を与えるが、これはやがて女三宮の降嫁により、さらに深刻な悲劇へと展開していく（第二節）。

第七章 女三宮の降嫁

源氏の準太上天皇位は、それにふさわしい「上の品」の女性選びとなり、女三宮の降嫁へと現実化していくのだが、これによって世間的にも紫上は妻の座を譲ることを意味していた。愛の不変を口にする源氏に対して、紫上は根底か

らの不信を抱かずにはおられなくなり、以後は自分の内面を人に見せることなく、嫉妬を抑え、不安な思いも胸に秘める女性へと変貌していった（第一節）。六条院の栄花を讃えるような女楽は、紫上の意向によって実施されたとはいえ、実質的には女三宮の琴の技量を披露するためであった。しかも、そこでの序列は、演奏技術としても明石上より下位に置かれ、もはや六条院において絶対的な優位者ではないことを彼女はまのあたりにする。源氏への不信に加え、そのような疎外感、喪失感が、女楽を終えた夜からの紫上の病気へと結びついてくる（第二節）。明石姫君の入内、今上帝の即位にともない、生母の明石上の存在は確実に高まり、女三宮は準太上天皇にふさわしい正妻として待遇される状況に、源氏との「ゆかり」による愛の信頼によって生きてきた紫上にとっては、身の置きどころのない煩悶に苦悩し、出家まで考えるにいたる。女楽後の発病、危篤と、生命は不安な状態にさらされるが、蘇生して後はそれまでにはなかった人への憐憫の情まで持つようになり、自身の境遇のはかなさを見つめながら、死へ向かっての静かな心の準備をするのであった。病となって二条院へ移り住むのは、華やかな六条院からの退場を意味し、そこそが「中の品」としての紫上の帰るべき場所でもあったことによる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、光源氏の物語において重要な役割を果たし、女主人公として描かれる紫上の人物造型について、その登場する少女の若紫時代から晩年にいたるまでの、苦悩に満ちた多難な生涯を、主題や構想などと関連させながら考察した内容である。要旨の最後にも触れたように、第七章で二条院こそが紫上の唯一帰り住むべき場所であり、それは「女三宮に対して、紫上の立場は無残にも没落し、三十年近い彼女の妻の座は、実は空虚なものであったことを厳しくも思い知らされるものである」と位置づけ、「光源氏にとって紫上は決して不動の妻ではなかったのである」と、はなやかな女主人公とされるわりには不安定な存在であったと論じていく。筆者はその視点として、紫上はとかく「上の品」と見られがちであったのを、空蟬や明石上などと同列の「中の品」の女性であったとし、その物語の方法を軸として全編を一貫した態度で分析していったのである。

『源氏物語』において紫上をどのように捉えるかという問題は、かなり古くからの関心の的だったが、戦後の研究史の上においてもっとも大きな影響を与えたのは、池田亀鑑による「源氏物語の構成とその技法」（昭和二十四年）での紫上論であった。そこでは、結婚から六条院での位置、発病と死、源氏の出家などの項目のもとに詳細な考察がなされ、紫上は女主人公であり、光源氏終生の伴侶であったとの結論を下す。これに対して、松尾聰は真の女主人公となり得るのは女三宮降嫁後ではないかとの提言をし、やがてこれが昭和三十年代以降の若菜巻ないしは第二部の構想、構造論議へと結びついていくようになる。それにともない、紫上は確固とした正妻の座についていたのかどうか問題ともなり、それは朝顔巻以降であるとか、明石姫君の養女を得て本妻の座を獲得したなどと、三十年代後半から四十年代にかけて論じられていった。それ以後今日まで、紫上に関する考察は百編を越える論文の数で、「ゆかり」のモチーフ、『伊勢物語』との関連、継子物語の系譜、嫉妬の問題、女三宮降嫁による悲劇、紫上の精神、紫上の発病と死等々、ますますテーマは複雑に絡みながら、より精緻な論議の展開となっているというのが現状であろう。筆者は、論文の注記にも数多くの文献を引用するように、それらの研究史を踏まえた上で、従来欠落していた紫上が「中の品」であるという視点から追究し、それ故に生涯にわたって味わわなければならなかった悲哀と苦悩の問題を、要旨でも触れたように多面的に考察していったのである。

第一章は、「中の品」が語られる雨夜の品定め論の分析をし、具体的な「葎の門」の女性として登場する空蟬・夕顔・末摘花の位置づけと、その延長線上にあるとする紫上のあり方について述べる。高貴な「上の品」の藤壺中宮の「ゆかり」として登場する紫上でありながら、「葎の門」の女性として認識されただけに源氏の二条院へ引き取られたこと、その人生は「中の品」の空蟬と重なることなどの指摘をする。諸説をまとめ、先学の説を吸収した点もありはするが、空蟬の運命との比較は斬新な発想で、「中の品」としての位置づけに独自の立場を見ることができ。第二章では、紫上を引き取るにいたる「ゆかり」の問題や、二条院での親子関係としての結びつきの意義を玉鬘

等との関連で論じ、さらに第三章で深めていく。源氏の須磨流謫はいくつかの要因があるとはいえ、本質的には藤壺との関係によっており、またそれを知るのは藤壺だけであった。最愛の紫上との別離が語られ、確固とした妻の座として世間的には見られながらも、源氏の運命にとって重要な意味を持つ須磨行き的事件とはまったく彼女は関わりがなく、物語の主題からはいわば疎外された存在に置かれていた。このような視点からの指摘は初めてのことであり、源氏帰京後の彼女の立場や、「ゆかり」としての意義を知る上においては貴重な提言である。また、藤壺の死（薄雲巻）によって紫上は「ゆかり」ではなくなり、一人の独立した女性として認められるようになったとするのが従来の考えであるが、朝顔巻で藤壺が源氏の夢に現れ、二人の関係を恨むことばの分析などにより、紫上は結局生涯「ゆかり」であったとする読みの方法も示す。

第四章では、紫上が春の桜にたとえられる意義として、『古今集』春部の季節の推移にともなう桜の配列に彼女の人生の縮図を読み取り、さらに春秋論争を通じて六条院における立場の微妙な変化に関する新しい見解を披瀝する。物語に登場する女性たちの花への比喻について、それぞれの性格とか容貌等との比較から論じられてはいるが、紫上と勅撰集の部立における桜の配列とを対比し、六条院の崩壊と結びつけた例はこれまではなく、発想の独自性を評価したい。第五章では、初音巻における源氏と紫上の新春のことほぎである贈答歌について、たんに歌の解釈にとどまらないきわめて興味深い構造的な読みを示し、さらに六条院入りした玉鬘や明石上との関連などから、女三宮の降嫁によって六条院が崩壊するのではなく、玉鬘十帖にすでにそのきざしの存したことを論証していく。このように、桜の花の散るように凋落する紫上の存在について、苦悩する嫉妬という視点から、明石上と朝顔姫君と対応させながらその心理を分析したのが第六章である。

六条院における紫上の位置づけを根底から変質させてしまったのは、若菜上巻における女三宮降嫁事件で、光源氏の運命やひいては物語の方法ともからめて古くからのテーマとなっており、今日でもさまざまなアプローチが試みられるが、筆者も「中の品」論の帰結として本論文最後の第七章にそれをあてる。源氏の好き心によってひきおこされた女三宮の降嫁は、いくら正当な理由を並べたて、紫上への愛の不変を誓ったところで、もはやとりかえしのつかない不信感を彼女は抱かずにはおられなくなり、それが疎外感、喪失感を醸成してしまう。それに追い討ちをかけたのが女楽でまのあたりにした席順であり、身分差の痛感であった。その夜からの発病、二条院への移転、危篤、蘇生と翻弄されるものの、彼女はもはや六条院には存在し得ない「中の品」の女性であったとする。このあたりの論の運びや二条院へ再び帰る意義づけなどは、筆者のすぐれた見解を含んでいる。

『源氏物語』の作中人物論は、必然的に構造論、物語の方法論ともかかわってくるが、筆者もその埒外ではない。それと、四百字詰原稿用紙にしておよそ八百枚余をついやし、ひたすら紫上論を「中の品」とする身分の視点から追究し、その揺れ動かされた運命を詳細に論じていく。膨大な分量の研究論文を読み、そこから新しい発想による解釈と人物論を展開し、一つのテーマのもとに体系的にまとめたことは高く評価できる。すでに、本論文の一部を研究雑誌に発表しており、これについて専門家からの賛辞を得ていることも付記しておく。ただ、全体の構成を整えるため、先学の説に引かれすぎた点もありはするが、文献資料を博搜し、随所に新しい独自の読みの方法を示すなど、今日の研究水準から少しもひけをとらない内容となっている。あえて難点を言えば、「中の品」論ですべてが解釈できるかどうか、また論文中でも述べているように、紫上の亡くなる御法巻、その後の死を悼む幻巻なども視野に入れる必要がある。今後は残された課題とともに、さらに継続して努力を重ね、中国における日本古典文学の研究の発展に大いに寄与してほしいと願っている。以上のような判断により、本審査委員会では、本論が博士（文学）の学位論文として、十分な価値を有するものと認定する。